

パラボート混合、日本は敗者復活戦へクルーが乗り越えた 解散危機

毎日新聞 2021/08/28 14:43

いいね | 3



© 毎日新聞 提供 混合かじ付きフォア（運動機能障害・視覚障害PR3）のレースを終えた有安諒平（右端）ら＝海の森水上競技場で2021年8月27日、幾島健太郎撮影

東京パラリンピック第4日は27日、海の森水上競技場でボートの混合かじ付きフォア（運動機能障害・視覚障害PR3）予選が行われ、日本（有安諒平、木村由＝以上湖猿、西岡利拡＝琵琶湖ク、八尾陽夏＝戸田中央総合病院ク）は8分14秒09で2組6位となり、敗者復活戦に回った。

コロナ下の解散危機を乗り越えた日本クルーが、ついに大舞台にたどりついた。

距離が前回大会の2倍に延びた2000メートルの長丁場。隣のレーンでは「世界最速」と評される英国が序盤から飛ばした。「ああ、これがパラリンピックなんだと気持ちが高揚した」と大黒柱の有安。日本は必死でくraitつ。しかし中盤に逆風を受けて失速したことが響き、最後はトップの英国に1分以上の差をつけられた。

視覚障害の有安と木村、上下肢障害の西岡と八尾、健常者コックスの立田寛之（戸田中央総合病院ク）が乗り込んだ日本艇。海外勢に比べてパワーで劣る分、多様なバックグラウンドを持つ5人が、いかに一つになるかが生命線だ。しかしコロナ下で先が見えない昨季、女子の代表候補選手が抜けた。そこへ今年2月に正式加入したのが17歳の木村だった。本番まで残り半年。急ピッチで息を合わせる練習を続けた。

もっとも有安は、統一感を重視するあまり個性を消してはいけなないと考える。「例えば木村選手はダイナミックに体を動かすことができる。既存のクルーに合わせすぎて、動きが小さくならないようにしないとイケないと思った」。長所をほめて伸ばしつつ、合宿で互いの理解を深めた。やがて個性と、全体の統一感がいい案配で両立するようになった。

2組に分かれて競う28日の敗者復活戦で各組の上位2チームに入れば、29日の決勝に進める。まだ欧州との実力差はあるが、有安は「以前は距離がありすぎたが、今は手の届くところに来ている」と一定の手応えを感じていた。【高橋秀明】